

46. 彼らはエリコに来た。

イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、  
テマイの子のバルテマイという盲人の物ごいが、道ばたにすわっていた。

47. ところが、ナザレのイエスだと聞くと、

「ダビデの子のイエスさま。  
私をあわれんでください。」と叫び始めた。

48. そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、

彼はますます、  
「ダビデの子よ。  
私をあわれんでください。」と叫び立てた。

49. すると、イエスは立ち止まって、

「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。  
そこで、彼らはその盲人を呼び、  
「心配しないでよい。  
さあ、立ちなさい。  
あなたをお呼びになっている。」と言った。

50. すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。

51. そこでイエスは、さらにこう言われた。

「わたしに何をしてほしいのか。」  
すると、盲人は言った。  
「先生。  
目が見えるようになることです。」

52. するとイエスは、彼に言われた。

「さあ、行きなさい。  
あなたの信仰があなたを救ったのです。」  
すると、  
すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

## 説教

今朝は、先週の続きで、神さまを礼拝することについて学びたいと思います。

今日の話は、イエスさまが十字架で死なれるためにガリラヤからエルサレムへ向かう途中での話です。イエスさまと弟子たちの一行は、多くの群衆を引き連れながらエリコの町を出発します。エルサレムから約 25 km 離れたエリコは、別名「なつめやしの町」と呼ばれ、良質の泉の湧く、緑豊かなオアシスの町でした。

この美しいエリコの町の道ばたに、ひとりの乞食が座って物乞いをしていました。その人の名は「テマイの子のバルテマイ」です(46)。

#### 46. 彼らはエリコに来た。

イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、  
テマイの子のバルテマイという盲人の物乞いが、道ばたにすわっていた。

「バルテマイ」という名前自体が「テマイの子ども」という意味でした。つまり、たとえ今は物乞いをしてる乞食であったとしても、実は彼にもきちんとした名前があり、父親がいた、れっきとした人の子なのです。小さい時には両親から可愛がられ、大切に育てられて、たくさんの愛情を受けていたことでしょう。しかし、それが生まれつきか、或いは途中で失明してしまったのか定かではありませんが、目が見えなくなってしまったからというもの、乞食をする以外に自分が生き延びていく道はなかったのです。現代のように、障害者教育や職業訓練、社会福祉が充実していた時代ではないので、一度障害を負ってしまうと、乞食をする以外、自分が食べていく道ははっきり言ってありませんでした。(社会福祉というものの自体、キリスト教会が歴史上この世に初めて生みだしてきたものなので、この時代には、イエスさまの働き以外、未だ何もなかった。) 想像するに、バルテマイの人生は、本当に暗い人生だったと思います。

「テマイの子のバルテマイという盲人の物乞いが、道ばたにすわっていた。」

「道ばたにすわっていた」の「すわっていた」と訳される言葉は、「じいっと座っている」、あるいは「住み着く」と訳される言葉です。つまり、このテマイの子のバルテマイという「盲人の物乞い」は、おそらく昼夜となく道ばたで生活し、道ばたで寝泊まりし、この先も道ばたで過ごして、道ばたで死んでいく、彼の今の現実も、これからの人生の見通しも、とにかく何もかもが大きな暗闇の中にあった、そんな様子が何か伝わってくるようです。彼こそが、旧約の預言者イザヤが預言した、あの「暗黒と暗闇に座する民」のひとりです。

しかし、そのようなバルテマイの人生に一筋の明るい光が差してきます。それがイエスさまとの出会いでした。

この時、ユダヤ最大の祭りである過越しの祭りを迎えようとしていました。ユダヤ中から参拝客がエルサレムになだれ込みます。このため、道中のオアシスであるエリコには、いつもに増して旅行客の出入りが多かったに違いありません。乞食のバルテマイとしても絶好の稼ぎ時です。そんな中、ひときわ「多くの群衆」が彼の目の前を通り過ぎていこうとしています。一体誰が通るのかと人に聞けば「ナザレのイエス」の一行だと言います。

バルテマイは大声で叫びます。「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」

#### 47. ところが、ナザレのイエスだと聞くと、

「ダビデの子のイエスさま。  
私をあわれんでください。」と叫び始めた。

叫び「始めた」とあるので、一回こっきりではなく何回も叫び続けたことがわかります。「叫ぶ」と訳される言葉は、例えば、今にも溺れ死にそうな人が、自分の生存を賭けて「助けてくれ」と叫ぶ本能的・動物的な絶叫を意味します。つまりこの時、バルテマイは、渾身の力を込め、ありったけの声を張り上げて、イエスさまに助けを求めたのです。そこにいた「大ぜい」の人々が「彼を黙らせようと、たしなめ」ますが、バルテマイはますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てます。

#### 48. そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、

彼はますます、  
「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。

「たしなめた」と訳される言葉は、「誰かを評価する、罰を科す、非難する、咎める、警告する、脅迫す

る」という意味があります。つまり、そこにいた「大ぜい」の人たちは、“この乞食め、物乞いの分際でイエスさまに向かって何という叫び声を上げやがるのか”と勝手に評価したのです。それで、「ふざけるな」と非難する者や、「やめろ」と咎める者、中には「やめないとぶっ飛ばすぞ」とか「もう施しを恵んでやらないぞ」などと脅迫する者までいたのかも知れません。いずれにせよ、様々な様子の彼らに共通していたのは、バルテマイを「黙らせる」という一点にありました。言い方や動機はいろいろあるにせよ、とにかく、何とかしてこいつの口を封じて黙らせなければ、という点で一致しておりました。

しかし、バルテマイはそれでも挫けません。どんなに周りの人から妨害されても「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び続けます。「やめろ」と咎められても、「ぶっ飛ばすぞ」と脅迫されても、かまうことなくバルテマイは「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び続けました。人からどう思われようと、人から何と言われようと、バルテマイはなりふり構わず、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」とひたすら叫び続けたのです。

見えぬバルテマイの目は、人や世間ではなく、ただイエスさまだけを見つめていました。普通の人なら、妨害されたら挫けてしまいます。やる気をなくします。非難され、咎められ、ましてや脅迫されたら、もうやめようかと心挫けてしまうものです。でも、バルテマイにとっては、それらはすべて「人の声」でした。どんなに非難されても、咎められても、脅迫されても、あるいは善意や同情で何かとアドバイスされたとしても、バルテマイにとっては、そんなのはあくまで「人の声」なのでした。バルテマイが聞きたいのは、「ダビデの子(救い主の意味)」イエスさまの御声です。人の声でなく、神の声です。いくら聞いても、人の声は彼を救うものではありません。いくら咎められても、あるいはどんなに良いアドバイスをもらったとしても、人の声は彼を全然満足させるものではありませんでした。

自分を救うのは「ダビデの子」イエスさま以外いないのです。そう確信していたからこそ、バルテマイは、人の迫害や妨害に屈することなく、否、妨害されれば妨害されるほど、自分の目では見えないイエスさまを呼び続けたのでした。

#### 48. そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、 彼はますます、

「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。

ここで、「大ぜい」と訳される言葉と、「ますます(直訳はもっと大きく)」と訳されている言葉は、同じ言葉「**polu,j**」が使われています。聖書記者が意識したかはわかりませんが、寄って集まって人々が妨害すればするほど、バルテマイの方も負けじと、もっと大きな声を張り上げてイエスさまを呼んだ様子が実に生き生きと描写されています。このバルテマイの叫びは、イエスさまの耳に届きました。彼の叫びを聞いて、イエスさまは、まず立ち止まります。

そして、「あの人を呼んで来なさい」と言われます。

#### 49. すると、イエスは立ち止まって、

「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。

弟子たちは、バルテマイを呼び、

「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言います。

このイエスさまのお招きを受けて、バルテマイは大喜びでイエスさまの所に駆けつけます。

#### 50. すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。

バルテマイは自分の上着を脱ぎ捨ててしまいます。上着といえば、路上生活をしている彼にとっては、寒さを凌ぐ布団の役割も兼ねた物です。律法でも、この上着は、どんなに貧乏な人に対しても、質物として取ってはならず、夕方には返すべきことが規定されています。

「もし、隣人の着る物を質に取るようなことをするのなら、日没までにそれを返さなければならない。

なぜなら、それは彼のただ一つのおおい、彼の身に着ける着物であるから。

彼はほかに何を着て寝ることができよう。

彼がわたしに向かって叫ぶとき、わたしはそれを聞き入れる。

わたしは情け深いから。」

出エジプト記 22:26~27

それぐらい貴重な物です。これはほとんど彼の全財産というべきものです。しかも、それを脱ぎ捨ててしまえば、目の見えない彼は、もう二度とそれを見つけ出すことができないかも知れません。それなのに、バルテマイはその上着を脱ぎ捨てました。それほど、つまり後先考えないほど、自分のなけなしの全財産を捨ててしまうほど、バルテマイは喜びに満ちておりました。

そして、

「すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。」

「すぐ立ち上がって」とは「躍り上がって」「ジャンプして」という意味です。「やったー！」と、目が見えないのに、飛び上がって喜びながらイエスさまのところに駆けつけて来たのです。

イエスさまはバルテマイに言われます。「わたしに何をしてほしいのか。」

#### 5 1. そこでイエスは、さらにこう言われた。

「わたしに何をしてほしいのか。」

すると、バルテマイは答えます。

「先生。目が見えるようになることです。」

「先生」は厳密に訳すと「私の先生」です。イエスさまとは初めて会ったばかりなのに、イエスさまはもう「彼の先生」、バルテマイにとって「私の先生」となっていました。そして、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねるイエスさまにバルテマイは迷いなくはっきりとこう告白します。「先生。目が見えるようになることです。」「他には何もありません。この目が、ただこの目が見えるようになることです。」

これに対して、イエスさまは言われます。

#### 5 2. するとイエスは、彼に言われた。

「さあ、行きなさい。

あなたの信仰があなたを救ったのです。」

すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

イエスさまは、このバルテマイの一連の行動を「あなたの信仰」と理解なさいます。そして、そのバルテマイの信仰によって、バルテマイは救われたと言われるのです。

教会とは、このようなどころではないかと思えます。教会には「多くの群衆」がいます。その大ぜいの人々の発言や行動は、必ずしもイエスさまに優しく導いてくれるものではないかも知れません。中には、イエスさまと出会う妨害や躓きとなることもあるかも知れません。しかし、そうした妨害や迫害に屈している人は、結局は信仰がないのだと思えます。つまりイエスさまを信じる信仰がないのです。

信仰とは、イエスさまを信じるのです。人をではありません。イエスさまを信じる、それが信仰です。どんなに人々から妨害や躓きを受けても、私たちはそれら一切を乗り越えて、イエスさまを信じなければなりません。教会にずうっとつながっている人は、多かれ少なかれそういう人たちであると思えますし、また、そうでなければならない、そうあらねばならない、バルテマイのようでなければならないとも思えます。バルテマイにはそういう信仰がありました。イエスさまを信じる信仰です。イエスさまが私を憐れんでくださるという信仰です。自分には何も無いけれども、ただの乞食に過ぎないが、道ばたの目の見えない乞食に過ぎないが、しかし、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と呼んだように、イエスさまはこの私を必ず「憐れんでくださる」「ダビデの子」だ、すなわち救い主だという信仰がありました。

そしてその彼の信仰の通りに、イエスさまは彼の叫びを聞き、足を止めて、彼を呼び、願いを聞いて、「あなたの信仰があなたを救った。」と、その信仰の通りに目を癒してくださったのです。それからバルテマイは、彼の信じた通りに目が見えるようになり、暗い彼の人生はばあっと明るくなって、それまでは心の目で見か見ることのできなかつたイエスさまを現実に目の前に見て、「イエスの行かれる所について行った」のでした。イエスさまを信じて、バルテマイの人生は完全に生まれ変わったのです。

私たちが、バルテマイのように、あらゆる「人の躓き」を乗り越えて、大胆にキリストを信じる信仰生活に励んでいくことができるよう、祈ります。そして願わくは、バルテマイをたしなめて妨害した「大ぜい」の人々のようにではなく、「心配しなくていいよ。さあ、立ちなさい。イエスさまがあなたをお呼びになっている。」と、真剣に主を呼び求める者をキリストに導く者になりたいと心から願います。